近代演劇研究への出発-「文芸研究」二論文の思い出-

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 明治大学文芸研究会 公開日: 2010-03-09 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 菅井, 幸雄 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10291/7394

近代演劇研究への出発

――「文芸研究」二論文の思い出――

菅井幸雄

「文芸研究」が創刊されたのは一九五四（昭和二十九）年九月だが、その第一号を手にした私の思い出は、いまも鮮烈である。ちょうどその年の四月に、私は文学部の助手に採用されていたからだ。「文芸研究」は、仏文の小川茂久さん（当時、私たちの間では「小川先生」という人は、誰もいなかった―菅井）が中心となって、編集の実務を担当しており、小川さんから第一号の刊行にいたるまでの苦労話を、それとなく聞かされていた。それだけに、助手になって半年後、ようやく第一号が研究室に積まれた時の関係者の喜びが大変なものであったことを、いまでもありありと思い出すことができる。

私は大学を卒業したあと、映画会社の大映に入社し、企画本部で、映画になりうるような小説、ルポルタージュ、講談などを読む仕事にたずさわり、封切の初日には浅草へ出向いて、観客の動向を見ていた。そのような私に、ある日、突然、山田肇先生から連絡があって、助手として仕事をするようにと、おすすめをいただいた。専任の大木直太郎先生、木下順二先生も、この人事に賛成されているという。私は清水の舞台から飛び降りるような思いで、助手としての仕事をはじめた。映画人生活をしていた私は、とまどいながらも、文学科の学術論文を掲載する「紀要」と位置づけた「文芸研究」を、ようやく出し得た時の先生方の喜びの輪の中に、入っていったのである。

第一号の巻頭言は、文学科長吉田甲子太郎先生の「ひとことだけ」だが、そのなかで「生きること、それ自身が人生の目的なのだ」そして「よりよく生きるための方法手段として文化があるのだ」と主張されていることに、私は注目した。さらに吉田先生は「文芸研究」が「人間生活の全体のために役立つ文化的な使命を果たすであろうことを切望してやまない」と強調されている。それぞれの研究論文を掲載するだけの、単なる「紀要」としての「文芸研究」に止まってはならないことを、教えられたのであった。

「文芸研究」の目次は、別に掲載されるはずだから、

第一号のそれぞれの論文についての、私の読後感をここに記すのは、さし控える。ただ私にとって刺激になったのは、学術論文の書き方が、主として研究者の個性とか資質に委せられている、ということであった。掲載された論文が、それぞれ自由に書かれているので、論文の内容を必ずしも十分に理解しえない私にも、興味をもたせてくれたのである。平野仁啓先生の「契沖――万葉批評史第一部（一）」と、御牧好隆先生の「ゲーテと自由」とでは、まったく異なる体裁で、論がすすめられていた。

俳優の演技創造方法に関心をもっていた私は、山田肇先生の指導を受けながら、一年後の年末に出される予定の「文芸研究」第二号に「スタニスラフスキイ・システムの歴史的意義」と題する論文を書く準備を、すすめていったのである。モスクワ芸術座の創立者であり、近代的な演技創造方法を確立したスタニスラフスキイの主著を『俳優修業』の題名で翻訳されていた山田先生は、アーサー・ミラーの『セールスマンの死』の翻訳・演出で知られる劇団民芸の演出家菅原卓氏から借りていたトビー・コールの『Acting : A Handbook of The Stanislavski Method』を、とくに私に示して、この本を参考にしながら、スタニスラフスキイ・システムについて論じるように、指導されたのである。

私の、スタニスラフスキイへの研究がはじまった。年一回刊行の「文芸研究」第二号の〆切が迫まってきた一九五五年十月、私は第一稿をまとめて、山田先生の指導をいただいたのである。峻厳にして、適切な、朱の入った原稿が、私の手許に返され、それにもとづいて決定稿をまとめ、この年の十二月に刊行された第二号に提出したのであった。

この論文は、思わぬ副産物を生んだ。演劇雑誌「テアトロ」の編集部から、スタニスラフスキイ・システムの形成にいたるまでの、演技方法論の歴史をまとめて書いてほしい、との依頼を受けたのである。勉強にもなるな、と思い、私は喜んで承諾し、その準備を、助手の仕事の合間に、はじめたのである。その研究の成果が、実際に「テアトロ」に掲載されたのは、論文発表から二年後の一九五七（昭和三二）年十二月号からであり、題名も『俳優芸術論の系譜（1）』となっていた。内容は、シェークスピアが『ハムレット』のなかで展開している演技論を主として分析したものであり、つづく第二回の掲載は、一九五八（昭和三三）年一月号で、内容は、モリエール、ディドロを中心としたものであった。

しかし、ディドロの分析は、この第二回目では終らずに、第三回の連載（一九五八年二月号）も、ディドロの『逆説俳優について』を論じなければならなかった。それほどに『逆説俳優について』は、十分に学ぶべきものがある、と私は考えたからである。つづく第四回（一九五八年三月号）では、レッシングの『ハンブルク演劇論』を研究し、第五回（一九五八年四月号）では、九十一条に分れているゲーテの『俳優法則』の内容を検討した。一か月を休んで再開した第六回（一九五八年六月号）では、いままで連載してきた五人の演技論を概括した上で、ソクラテスの『イオン』をとりあげ、第七回（一九五八年七月号）も『イオン』の分析を、つづけておこなった。『イオン』のなかで示されているインスピレーションについての考えを、スタニスラフスキイ・システムと比較検討したのである。「文芸研究」に発表した論文「スタニスラフスキイ・システムの歴史的意義」が、私にこのような機会をもたらしてくれたのであった。

この論文の発表後も、山田先生からはいろいろと指導していただいたが、論文を訂正するような具体的なお教えをいただいたのは、この論文のみである。山田先生は、安保問題で騒然とした一九六〇（昭和三十五）年十月から二年間、演劇学専攻主任を兼ねながら、文学科長に就任されて、教務のお仕事をされるようになった。すでに大木直太郎先生は、一九五六（昭和三十一）年から四年間、文学科長をされていたので、私のような若手を指導される機会が、減っていたのであった。

文学部は、私の論文発表の次の年、一九五六（昭和三一）年に、旧制専門部の文芸科から数えて、二十五周年になったので、その創立記念の式典をおこなっている。そのエネルギーを発揮して、「文芸研究」も、七月に第三号、十二月に第四号を発行、年二回刊行の方針を確立した。私はこの年、第四号に「近代劇の概念」を執筆されてお忙しい山田先生、大学全体の教務にご多忙な大木先生の指導を、直接的には受けることができないまま、翌一九五七（昭和三十二）年十二月に刊行された次の第五号に、アイルランドの劇作家を論じた「J・M・シング論」を発表した。レイモンド・ウィリアムズの『Drama from Ibsen to Eliot』を参考にしながら、アイルランドの民話をもとにして、すぐれた近代劇を書いたシングのドラマツルギーの特徴を、論究したものである。

シングの戯曲は、ふつうは、喜劇として『谷の影』『鋳掛屋の婚礼』『聖者の泉』『西国の伊達男』の四作品、

悲劇として『海へ騎りゆく人々』『悲しみのデアドラ』の二作品に分類されている。私は従来のこのような分類では、シングの戯曲の特性は明らかにしえないのではないか、と考えた。私の念頭には、スペインの民話をもとにして、現代にも通用しうるドラマを書いたにもかかわらず、内戦のなかで、フランコ派の軍人に虐殺されたフェデリーコ・ガルシーア・ロルカがあり、日本では民話をもとにして、近代劇を書きすすめている木下順二の仕事も、無視するわけにはいかない。

山田、大木両先生を除いては、専任教員は木下先生と私だけであったという事情もあり、実際の劇作活動でもご多忙な木下先生には、「文芸研究」に掲載後に、この論文を読んでいただいた。木下先生からは、民話と近代劇との関連を、世界的視野に立って論じる着眼のポイントが、論文の背後にかくされているその分析方法がいい、と評価された思い出が残っている。

木下先生が見ぬかれたように、私がこの論文のなかで、具体的に強調したのは、アイルランド農民の話しことばの記録の上に、シングの戯曲のせりふが成り立っている、ということであった。ドラマの本質に適したことばを創造することは、一見容易であるかのようにみえて、実は大変困難な仕事である。その具体的な過程を、シングのせりふから読みとることができる。私はこの論文を書いていて、本当に楽しかった。豊かに生々と語られているシングのせりふを通して、アイルランドの農民をイメージすることができたからである。

このような思い出をたどってみると、日本の近代演劇史をテーマとする私の、ささやかな研究の出発点が、「文芸研究」に発表した二つの論文であったことは、明らかである。私にとって「文芸研究」とは、みずからの研究を率直に書くことが可能な場であり、そのような営みを有形無形に支えていただいた指導の諸先生、同僚の暖かい配慮も忘れるわけにはいかない。「文芸研究」第一〇〇号記念号の刊行にあたって、私の思いは、はるかに半世紀前に飛ぶのである。